

非行-臨床心理学的考察(その1)

著者名(日)	田村 正晨
雑誌名	埼玉医科大学進学課程紀要
巻	3
ページ	23-32
発行年	1984-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1386/00000065/

非行——臨床心理学的考察 (その 1)

An approach to delinquency from a clinical psychological point of view No. 1

田 村 正 晨

(Masaaki Tamura)

社会問題化している児童青少年の非行の問題の今回は第1報として、非行の原因のなかから、育児の責任を果たしていない親と教師の問題を、過去7年に及ぶ著者の臨床経験と臨床心理学的知見とから考察した。

今日の家庭における躾教育ならびに学校教育の問題点は、過保護に育ててはいけない、子供にできるだけ干渉しないようにという理念が、子供の精神発達、とりわけ自律的適応の時代における、適応の内面化の問題を軽視したかたちで定着しているところにある。

このことを、著者の臨床例の分析結果から得られた母親の態度とともに明らかにした。

I. 最近の児童青少年非行の特徴

まず、ひとつの資料を見ていただきたい。図1は、戦後における、わが国少年の刑法犯(検挙されたもの)の人口比の推移を示している。

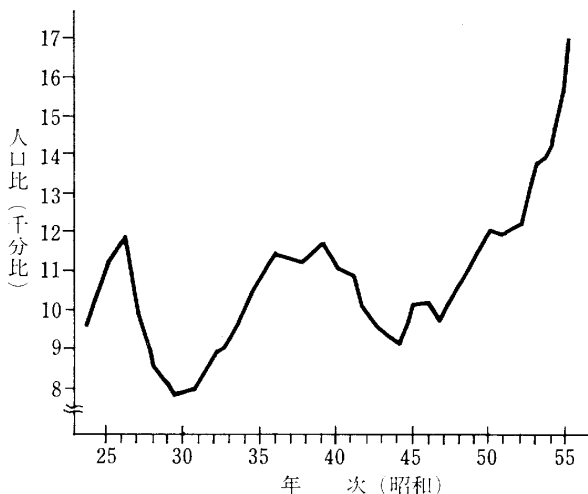


図1 少年刑法犯検挙者数人口比の推移

この数値には、自動車運転による業務上致死傷は含まれていない。

戦後、2度のピークを示しており、47年以降は増加の一途をたどっていることがわかるであろう。

う。

また、表1は、刑法犯の罪種別検挙者数と構成比(%)の推移を示すものである。

表1 刑法犯(14~20歳)の罪種別検挙者数(人)と構成比(%)の推移(安香宏「現代青年の非行のメカニズム」より引用)

	昭和39年	昭和44年	昭和55年
財産犯	97,711(65.0)	70,612(69.8)	136,799(86.0)
粗暴犯	44,778(29.8)	25,165(24.9)	19,886(12.5)
性犯	5,528(3.7)	3,709(3.7)	1,497(0.9)
凶悪犯	2,415(1.6)	1,702(1.7)	972(0.6)
小計	150,432(100.0)	101,188(100.0)	159,154(100.0)
その他	40,010	86,650	57,230
総計	190,442	187,838	216,384

財産犯=窃盗、詐欺、横領
 粗暴犯=恐喝、暴行、傷害
 性犯=強姦、わいせつ行為
 凶悪犯=強盗、殺人、放火
 その他=業務上過失致死傷など

この表の年次は、表1に見る如き激増期である昭和55年と、その前の激増期であった昭和39年、さらにグラフの谷間に相当する昭和44年に関し

て、罪種別検挙者数の構成比というインジケータで比較したものである。表1から、過去においては、増加の時期と減少の時期とにかかわらず構成比はほぼ一定であったのに対して、最近では、構成比に大きな変化が生じていることがわかるであろう。おおまかな言い方をすれば、増加の傾向が認められるのは、財産犯であり減少傾向が認められるのは、粗暴犯、性犯、凶悪犯である。

このようなことから、非行が量的増加傾向を示すだけでなく、質的にも、以前の状況とは異質なものとなっていることは確かである。

増加傾向が認められた財産犯の内訳であるが、万引き、自転車やバイクなどの無断使用、自動販売機へのいたずらなどで、金額的にも少なく、単純な動機にもとづく窃盗や横領などが中心を占めている。

また、減少傾向が認められた、粗暴犯、性犯、凶悪犯については、数値をそのままに受けとることには問題がある。つまり、各種の暴力行為や、性的問題傾向が文字通り減少してきているわけではなく、それらが、犯罪という形態をとらずに、家庭内や学校領域内ではむしろ激増していることは事実である。

しかも、非行の低年齢化と広域化は、れき然とした事実であるし、過去の臨床例に見られたような、個人の資質的問題や環境的問題を越えて、ごく一般の児童青少年の非行が大幅に増加の一途をたどっている点に注目しなければならない。また、女子非行の増加も今日的課題である。しかも、罪の意識が希薄であり、補導された場合でも罪悪感に乏しいという特徴が認められるのである。

II. 非行化の原因

このように、多様化と広域化の一途をたどる児童青少年の非行を、本気で無くすことを考えるのであれば、対症療法をくりかえしていたのでは効果はうすい。徹底した防止策を講じていかなければならない。もっとも有効な防止策は、9歳頃までの他律的適応の時代における、育児の責任を、親と教師が十分に果たすことである。

中学生を中心とした児童青少年に非行反乱が多いのは何故かを、著者はつぎの5つの原因による

ものと考えている。

1. 親が、育児の責任を果たしていない。
2. 学校が信頼に値する教育を行っていない。とくに、子供の精神発達について十分に理解し、教育指導に活かしている教師がすくないこと。また、知育と体育に重点を置く指導が定着していて、心を育てる教育が軽視されている。しかし、人間の精神機能の発達が体育的側面に依存してなされるのは、5～6歳までである。この点、もっと根本的に考えた指導が必要である。
3. 現実原則にそぐわない価値観の形成
4. 母親主導型家庭の増加。おもに、男の子を健全なパーソナリティの持ち主に育てあげるために大きな問題点を内包している
5. 大人の権利意識の異常さ

以上、5大原因のうち、今回は、1の「育児の責任を果たすとは、どういうことか」について、著者が過去7年間に治療した92例の臨床例を詳細に分析して、今日、社会問題と化している児童青少年の非行の原因と対策を、臨床心理学的立場から明らかにしようとするものである。

92例の内訳は、表2に示した通りである。

また、非行の種類は以下の通りである。

表2 臨床例の内訳（数字は全て実人数）

	男子 (N=84)	女子 (N=8)
小学生	40	3
中学生	21	2
高校生	9	1
大学生及び社会人	14	2

《男子の場合》

小学生 (N=40)

登校拒否	8
校内暴力	16
家庭内暴力	1
窃盗	9
恐喝・傷害	3
その他	3

中学生 (N=21)

校内暴力	5
------	---

家庭内暴力	5
登校拒否	1
窃盗	2
恐喝	2
傷害	2
その他	4
高校生 (N=9)	
登校拒否	2
家庭内暴力	3
恐喝	1
傷害	2
その他	1
大学生および社会人 (N=14)	
登校(出社)拒否	6
企業内暴力	6
その他	2
《女子の場合》	
小学生 (N=3)	
登校拒否	1
ひどくいじめられる	2
中学生 (N=2)	
売春類似行為	2
高校生 (N=1)	
薬物乱用	1
大学生および社会人 (N=2)	
売春類似行為	1
企業内暴力	1

III. 他律的適応と自律的適応

人間の子供は人間として生まれてくるものではなく、人間に作りあげられていくものであることは、野生児に関する報告などを検討してみれば、明らかな事実である。このことは、人間の精神発達の過程で、どのような躰や教育がなされたかによって、その人間の価値観や社会適応の仕方が決まることを意味している。したがって、親が子供の躰を効果的に行なうためには、精神発達に関して、より深い理解が要求される。なかでも、「適応の発達」について、正しく理解することが必要である。

適応の発達に関して、著者は、大きくふたつの段階を区分して考えている。そのひとつは、9歳頃までの「他律的適応の時代」であり、他のひとつは、9歳以降の「自律的適応の時代」である。

育児の責任を果たすということを、ひと言で言えば、自律的適応の時代を迎えた子供が、適応の内面化をスムーズにやってのけられるように育てあげることである。そのためには、9歳以前の他律的適応の時代の躰の仕方が問題である。他律的適応の時代に、十分な躰がなされていれば、非行は子供自身の手によって自己抑制されるようになるのである。

9歳以前の他律的適応の時代には、子供は抽象的思考の能力が未だ発達していないために、なにが従うべき規範であるかを、みずからの力で見極めることができない。そこで、親や教師が、世の中の代弁者として、将来、一人前の人間となったときに受けいれなければならない規範を、命令という形で十分に与えていくことである。

幼児には生まれつき備わっている本能としての行動の仕方がある。親の命令に従うことは、本能的な行動の仕方を捨てて、自分の行動の仕方を社会規範に適合させることであるから、幼児にとって、このことは、非常に大きな不満を抱かせる結果になる。したがって、この時期の躰は、十分に時間をかけたものでなければならぬし、親がいつも身近にいて、ひとつひとつ、ていねいに指導をくりかえしていかなければならない。

これが、家庭における躰であり、教育である。子供は、親にたいする適応というかたちで、間接的に社会適応の第一歩を踏み出すことになるのである。

手足や身体を常に清潔に保つこと、車に注意して右側を通り、車道に飛び出してはいけない。どんなに欲しくても、お店の品を黙って持ち出してはならない、どんな理由があっても、相手に怪我をさせたり、相手を傷つける行為は許されない。排泄は、いつも所定の場所ですること。

こうした躰を、親が命令というかたちで、くりかえし与えていき、子供がそれを受けいれて、それに従うことが、他律的適応の時代における社会適応の第一歩である。

この時期の躰の在り方は、最も大切な意味をもっており、親と教師が、社会の代弁者としての役割を十分に果たすことが不可欠の条件になる。つまり、子供は、親と教師への適応という形で、間

接的に社会適応を経験するからである。学校の規則にしても、直接それを理解したうえで受け入れるわけではなく、教師の命令に従うことで規則に従うのである。この意味でも、他律的適応の時代の子供の躰にあたっては、親も教師も絶対的権威者としての存在でなければならないのである。権威者としての親と教師に絶対服従の態度で生きていく存在であるし、そうすることが、この年代の子供の社会適応なのである。そこには、理屈など存在しない。

問題は、この時期に、親や教師が権威者としての役割を果たさなかった場合である。そのような場合は、善と悪とをきめこまかくていねいに教え込んでいくことができないため、将来、社会生活を営んでいく上で最低限必要とされるモラルさえ身につけることができずに、姿、形だけが成長した化物人間ができあがってしまうのである。他人に迷惑をかけても悪いという自覚の無い現代人のルーツは、この他律的適応の時代における、親、教師が、権威者としての役割を十分に果たしていないところにあることは、多くの臨床例が示している。

悲惨なケースにかかわる関係上、校長、母親達と会う機会が多いのであるが、どうみても異常としか思えないようなケースが黙認されていて、驚かされるのである。子供達には、できるだけ干渉しないように、という考え方から、小学校に入学したばかりの子供が、特定の数人の男子によって、一方的に殴る蹴るなどの暴力行為を毎日のように受けて、打撲や内出血を起こしていたり、身体のあるところから血を流して帰宅するケース（同じようなケースを著者はこの7年間に27例確かめてきた）に対しても、いっこうに問題の解決をはかるうとはしていない。なかには、小学校5年の男子が、果物ナイフを毎日学校に持参して、誰れかれの区別なく切りつけているケースも見られたが、学校としては、根本的な指導対策を立てておらず、事実が外部にもれないようにと、そればかりを優先させているケースさえみとめられた。

こうしたケースをかかえている小学校の校長の子供を見る目、教師に対する考え方の中には、「殴ったり、蹴ったりするのは子供の日常であっ

て、ごくあたりまえのことなのですよ。まあ、元氣な証拠ですから、あまりとやかく言わないほうがいいんです」という共通した考え方がみとめられるのである。母親達にも病根がみとめられる。「子供達から暴力を取り除いてしまったら、子供達は完全に委縮してしまいますよ」と真面目に発言する母親が多い。

子供達の精神発達のとりのわけ、育児をすすめていく上で特に大切な“適応の発達”を知らない母親、無責任な親と教師が、いかに多く存在しているか、暗澹たる気持ちにならざるを得ないのである。現代の歪んだ体質の子供達をつくり出しているのは、まぎれもなく、こうした親であり、教師なのだと痛感させられる。

IV. “過保護に育ててはいけない”という考え方を誤解している

過保護に育ててはいけない、ということと、できるだけ干渉しないほうが子供のためによい結果をもたらすということが、極めてすぐれた育児理念であるかのように信じて疑わない親と教師がなんと多いことか。

“過保護に育ててはいけない”という育児理念は第二次大戦後、欧米から無差別に押し寄せてきた教育論がもとになっている。そこには、二つの基本理念が含まれていた。その一つは、「子供が何をしようとも、子供を理解すること」であり、いま一つは、「いかなる場合にも、子供にフラストレーションを経験させてはならない」というものであった。はじめて経験する敗戦の混乱のなかで、特に心痛はなはだしかったのは、当時の文教担当者であったと思われる。従来からの封建社会の教育理念からの脱脚を連合軍司令部より求められていた文教担当者が、欧米の教育理念にとびついた気持は理解できる。

しかし、こうした考え方が、乳幼児期の子供に、きめこまかい躰を行なうと、将来、非行に走るようになる、という功妙な論理のすりかえを生み出す結果になったのである。乳幼児期の子供に、親が常に側にいて、怪我をしたり交通事故に会わないように目を光らせ、十分に注意を与える。して良いこと悪いことを、ひとつひとつ丁寧に、く

りかえし教え込もうとする育児を、過保護な育て方であると周囲の親も教師も批判してきた。そして、いつのまにかこうした育児理念が定着してしまったのである。その結果、世の中の大切なモラルを、最も大切な他律的適応の時代の子供に対して、親も教師も、手とり足とりして十分に教え込もうとはしなくなってしまったのである。

これでは、子供のパーソナリティの中に、有効に機能するセルフ・コントロールの能力など育成されにくい。セルフ・コントロールの能力が育たずに成長することは、基礎のいいかげんな建物と同じで、わずかな風雪にも耐えられない脆弱なパーソナリティが形成されても、なんの不思議はないのである。

欧米からの育児理念の背後には、欧米独特の宗教的風土というものがあった。わが国の風土は、欧米のそれとは明らかに異質のものであった。ここに、欧米の育児理念がわが国の風土に有効な根をおろすことができなかった理由がある。しかし、当時の欧米の育児理念そのものにも誤りがあったことも否定できないと思う。

人間の子供は人間として生まれてくるものではない、と前記したが、人間社会のなかで、それも、母親との対人関係の中で、さまざまなモラルを身につけ、セルフ・コントロールの能力を育成していく。この場合、適度なフラストレーションを体験させることが、健全なパーソナリティ形成にいかに関与するかの問題は、Sullivan H. S. の言葉を借りるまでもないであろう。Sullivan H. S. のユーフオリアの考え方をもってしても適度のフラストレーションは不可欠なものであるし、Freud S. のパーソナリティ形成に関する理論にしても、リビドーが直面する障壁を仮定し、これとの葛藤を体験することと、その葛藤をいかに処理するかが、パーソナリティの形成に大きな影響を及ぼすものとし、やはり、フラストレーションや葛藤体験を不可避的なものと考えている。

母親（養育者）との対人関係を基本にした Sullivan H. S. の臨床的性格学は、すぐれた理論であるが、他人にたいする思いやりの心は、アタッチメント（attachment）と呼ばれる母親との特別な結びつきのうえに形成されてくる、という考

え方は、多くの臨床家の間で肯定されている。アタッチメントは、生理的・必要の充足を、母親にたいして依存しているという事実（二次的動因説）とは基本的に異なる現象であるという意見が強い（例えば、J. ボウルビー；H. F. ハーロウ；M. D. エインスワース等）。M. D. エインスワースの実証的研究によれば、アタッチメント形成に関与する重要な要因として、

（1）乳幼児の発する各種のサインを母親が見逃がさず、いかに敏感に反応するか

（2）母—子間の交互作用の質と量の問題

（3）母—子間の交互作用を喜びあえる母親であること

以上3点が指摘されている。これは、乳幼児期における育児に際して、母親がいかに子供と密着した状態で、しかも育児に専念することが重要であることを示すものである。他律的適応の時代の子供には、十分な保護が必要なのである。他律的適応の時代に、母親が十分に手をかけ、心を配り保護されて育てられた子供は、自律的適応の時代を迎えてから、社会的にみて望ましい行動を示すような、セルフ・コントロールの能力を備えた、情緒的にも安定した行動を示すようになることは、P. M. サイモンズも主張するところである。“過保護に育ててはいけない”ということは、自律的適応の時代の子供達に必要な考え方ではあっても、9歳以下の他律的適応の時代の子供達には通用しない理念である。過保護という言葉は、文字通り、子供に対して保護的であり過ぎる親の態度をさして言うのであるが、もうすこし掘り下げて考えてみれば、子供に対して果すべき親の機能を、保護機能と文化伝達機能に二分した場合、保護機能のみが優先され、文化伝達機能が十分に果されていない親の育児態度を過保護と呼ぶことができる。しかし、育児にあたって、子供の精神発達に応じた、適切で十分な保護が大切であることは、次の事例からも理解できるであろう。過保護云々の問題は、あくまでも、子供の年齢や発達段階との対応において、とらえられるべき問題であることがわかると思う。

V. 事例

T. K. ♂, 18歳；公立高校3年在学中

家族構成；父親47歳，大学教授，国立大学大学院修了

母親40歳，専業主婦，私立大学英文科卒

弟14歳，私立中学2年存学中

初回面接；昭和56年11月27日

56年11月2日，父親から，息子T. K. 君のことで相談を受け，11月19日に初回面接をするはずであったが，当日，T. K. 君は現れず，父親だけが来談。父親がT. K. 君にたいして，著者と会うことを話すと，激しいけんまくで，部屋の中の物を投げつけたり，食卓をひっくりかえしたりした。母親の顔に植木鉢を投げつけて怪我させたり，書棚の文献類を部屋中に放り出してしまう始末。「どうしておれがそんなところに行かなくちゃいけないんだ！」と大声でどなり散らした。こちらからお願いしておきながら申し訳ない，とのことであった。

この日の父親の経過報告と，11月27日以降T. K. 君と定期的にアポイントメントがとれて，直接面接した内容とを総合して，T. K. 君像をまとめてみると，おおよそ，次のようであった。

小学校時代のT. K. 君は成績がクラスで1, 2番よりさがったことはなかった。学校での出来事なども，母親によく話した。

しかし，思春期に入中1の頃から，次第に無力になり，家族そろっての食事の席でも，自分のほうから話を切り出すことはめったになかった。

この頃から，T. K. 君の成績は急に下がりはじめた。なかでも，数学の成績低下が著しかった。本人自身は，具体的にどのような勉強の方法をとればよいかかわからず，ただ焦躁感に悩まされ続けていた。

成績低下は，当然，家庭で問題になった。母親が成績のことで注意すると，食事の途中であっても，さっさと自分の部屋に閉じ込めり，口もきこうとしなかった。担任教師のはげましと強力な指導で，その後，成績もある程度まで回復した。

高校進学が近づくにつれて，父親は学区内の一流高校の受験をすすめるようになったが，成績の点で二流の公立高校へ進学した。

この時から，T. K. 君に対する父親の接し方に今までと違う変化が現われはじめた。「お前はともていい大学には行けそうもないし，将来は決まったようなものだ……」と突き放すような態度を見せることがしばしばみとめられた。

母親も懸命であった。夫の社会的地位を考えると，どうしても口うるさくT. K. 君に接してしまう。高2の夏休みに入った日に「〇〇大学に合格できないのなら大学なんか行かなくていい。高校出たら働きなさい！」という言葉が出てしまった。

この時のやりとりがきっかけで，T. K. 君は母親に対して乱暴を働くようになったのである。弟に対しては終始無視する態度を示していたが，母親に対しては，しばしば物を投げつけたり，殴る蹴るといった暴力行為と暴言を浴びせたりしていた。

以上が経過の概略であるが，注意しなくてはならないことのひとつに，激しい感情暴発や暴力行為をくりかえす者のなかに，てんかんがかくれていないか，分裂病の初期症状との関連性はないか，という点である。著者とともに臨床治療にあたっている精神医学者の診断で，本ケースの場合は，これらの精神科疾患は認められなかった。

T. K. 君は著者とは比較的によく話した。最初の段階では，家庭訪問による治療でなければむずかしいケースではないかと予想したのであるが，面接にはほとんど欠かさずに出向いてきた。そして，「親に乱暴したって自分の問題が解決しないことはよくわかってます」と本心をのぞかせたりしている。T. K. 君に欠けているのは，困難な事態に直面したときに，積極的に自力で解決しようとする心構えであった。

ここで，T. K. 君自身の話と，母親の話とから，T. K. 君の幼児期の躾の仕方をふりかえってみるが，そこには，家庭内暴力をふるう他の青少年と共通した特徴を指摘することができるのである。そこに共通して認められる躾の傾向は，家庭内暴力以外の，盗み，校内暴力，おどし，性的非行，登行拒否などの背景としても，共通した傾向であ

ることを特に指摘しておかなければならない。

母親がどういう理念で T. K. 君を育ててきたかという、特にこれといえる確かな方法論を持っていたわけではなかった。育児書や躾に関する書物を読んで、「過保護に育ててはいけない」という基本理念だけは守ってきたという。“過保護”という言葉は、親の態度としてはまことに忌まわしい態度であり、避けなければならない態度として忌み嫌われている。他律的適応の時代の T. K. 君は、母親の言うことを、とてもよくききわけていた。3歳で九九の掛け算の大部分はわかったし、文字をおぼえるのも得意であった。親の目から見て、実に好ましい男子であった。しかし、子供は本能のままに行動しようとする。このことは T. K. 君といえども例外ではなかった。幼稚園時代には、椅子に腰かけている女の子を後ろへ突きおとしたり、自分の思うようにことが運ばないと、相手に石を投げつけたり、ナワとびのナワをびゅんびゅんふりまわしたり、けとばしたりをくりかえしていた。

こういう行為を見ていても、母親は、「そんなことをしては駄目ですよ」と、ひとこと注意を与えるだけで、厳しくやめさせようとはしていない。「あまり口やかましく注意すると、大きくなってから親に反抗したり、家庭内暴力をふるうようになるから……」という考え方を信じていたのである。他律的適応の時代になさなければならない躾を怠っていたことは明らかである。

このような育児の誤りが、T. K. 君のような家庭内暴力をはじめとする問題行動の原因になることを銘記しなければならない。

くりかえしのべることとなるが、こうした臨床例とその背景にある要因を詳細に分析すると、中学生を中心とする子供達の示す問題行動の激増傾向は、子供の精神発達、なかでも「適応の発達」について理解していない親と教師によって、作りだされてきているとさえ思われるのである。こう考えると、家庭内暴力も校内暴力も、また、その他一連の問題行動も、親と教師を病原菌とする新しいタイプの現代病であり、社会病理現象だといってもよいであろう。

T. K. 君の母親もそうであったように、ほとん

どの母親が、あるいは、教師の大部分のものが「過保護に育ててはいけない」ということを盲信しており、子供の自主性をできる限り尊重するために、干渉しないタイプなのである。しかるに、T. K. 君をはじめ問題行動を引き起こした子供達の現実はどうかといえば、これとは全く逆であり、セルフ・コントロールの能力が極めて弱体であることがわかるのである。

著者が、これまでに扱ってきた児童青少年の問題行動は、その大部分が、親と教師による躾の問題に帰属させて考えるのが妥当であると思われる。そして、そこに共通して認められるのは、過保護論の誤った適用である。親が育児の責任を果し、将来、有効に機能する躾をするためには、「適応の発達」について正しい知識と理解を持つことが急務であることを、くりかえし強調しておかなければならない。

他律的適応の時代においては、「殴る蹴るが子供の日常であり、健康の証」ではなく、罪のない子供に暴行を加えるような人間の尊厳を傷つけ合うような反社会的な芽をつみとる努力をしなければならない。そうすることによって、セルフ・コントロールの能力を十分に植えつけていくことが、教育の使命であり、親と教師の果すべき最低限度の責任でもある。しかも、子供の将来にとって不可欠な条件であるセルフ・コントロールの能力は、他律的適応の時代（9歳頃まで）に十分身につけてやらなければ、一生つきにくいのである。

このことは、建造物にたとえてみればよく理解できる。9歳頃までの他律的適応の時代は、土台をしっかりと築く時期に相当している。土台がいかに堅固であれば、建物をどんな立派な材料で作っても、地震や風水害ですぐに崩れ落ちてしまうのに似ている。

我が子の将来を考えない親はいないし、教え子が事件を起こして新聞沙汰になることを喜ぶ教師は存在しないはずである。しかし、実際には、セルフ・コントロールの能力を十分身につけない人間を積極的に作り出している現実が認められるのである。

現実とは、何故そうなのか？

「殴る蹴るは子供の特徴だから」とそのままに
してしまうのか？

原因は、子育ての理念として「過保護に育てて
はいけない」という考え方に親も教師も毒されて
しまっているためである。「過保護に育ててはい
けない」という言葉は、すでに指摘したように、
子供の精神発達を歪めてしまう恐れがあるとき
に用いられるべきものである。人間の精神発達に決
定的な影響を及ぼす三大条件については周知の通
りである。即ち、

- ① 遺伝規定性
- ② 環境規定性
- ③ 成熟（レディネス）

である。これら三大条件にマイナスの影響を与え
る親と教師の態度こそ改めなければならないので
ある。

過保護がかかわりがあるとすれば、これらの条
件のなかでも、環境規定性とレディネスに関して
である。しかし、レディネスは子供の諸能力（歩
行といった運動機能的なものから文字をおぼえて
使用する能力、読書の能力、ものごとの善悪を判
断する能力など）は、それを発達させるべき時期
がきまっており、その時期に十分な指導と訓練が
なされなければ、その子供は、生涯を通じてその
能力を発揮することができなくなってしまうので
ある。読書能力のレディネスは6歳前後であるか
ら、この時期、それも比較的短い期間に十分に
訓練しておかないと、その子供は、一生読書能力
の点で劣る人間になってしまうのである。

レディネスに関して、過保護が問題になるとす
れば、その子供が発達させようとする諸能力の発
達を、あえて妨害する場合である。読書の能力を
発達させるべき時に、片ぱしから本をとりあげて
しまえば、それこそ問題であるが、そういう親は
存在しないはずである。むしろ、この時期に、親
が内容を吟味して、積極的に本を与えてやり、一
緒に読んだり、聞き役にまわったりすることは、
好ましいことなのである。

環境規定性にしても、同様に考えてよい。過保
護だと言われる親ほど子供の生育環境をベストな
ものへと近づけていくことが可能である。このこ
とは、他律的適応の時代の育児にとっては極めて

大切なことからである。良好な養育環境のなか
で、子供のパーソナリティが健全な発達をとげる
ことになるからである。

9歳頃までの他律的適応の時代（親や教師を通
じて社会規範を学ぶ）の子供にたいしては、過干
渉は控えなければならないが十分な保護と積極的
な指導が育児のための不可欠な条件となるのであ
る。

建造物の基礎固めに相当する他律的適応の時代
の子供にたいする親の態度の誤りや、教育現場の
教師が、子供の問題行動を見逃しがちである現実
も、この「過保護に育ててはいけない」という考
え方を、子供の精神発達や子供の社会適応につい
ての見識を十分に持たずに、ただ感覚的に受け入
れているに過ぎないからである。

VI 適応の内面化の重要性

他律的適応の時代を通して親と教師を介して間
接的に社会適応を行ってきた子供達の状態は、児
童期の後半（9歳以降）から青年期にかけて変化
が認められるようになる。自律的適応の時代には
いるのである。この頃になると、子供は、世の中
の規範を直接知ようになり、それに従わなければ
ならないことを悟るようになる。親と教師への
適応であったものが直接世の中の規範に適応す
るように変化してくる。そうすると、代弁者として、
世の中の規範を教えてくれる、親、教師は必要で
はなくなってくる。権威の対象も、他律的適応の
時代とは違い親や教師は、絶対的存在ではなくな
ってしまう。

いうまでもなく、こうした変化は子供の精神発
達の所産であり、抽象的思考の能力の発達という
問題と関係が深い。

児童期の後半から思春期、青年期にかけての最
大の課題は“適応の内面化”をスムーズに行なう
ことができるか否かである。9歳を過ぎる頃から、
脳の新しい皮質の前頭連合野の脳細胞のからみ
合いがほぼ完成されてくる。抽象的思考が可能に
なる。親や教師から、こうしなさい！と命令さ
れて、それに従うのは他律的適応であるが、自分
がこうすべきだと判断して行動するのは、自律的
適応である。「右側通行ですよ」と命令されて右側

を通るのは他律的適応であるが、左側を通るより右側を通ったほうが、対向車がよくわかり安全だからと自ら判断して右側を通るのは、自律的適応である。思春期から青年期にかけて、完成させなければならない独立ということの意味は、経済的な問題よりも、自律的適応のできる人間になることである。自律的適応が十分になり、独り立ちできてこそ一人前の人間として認められるわけである。こうした意味での自律的適応を可能にするためには、世の中の規範を自分のものにしなければならない。「ひとに怪我をさせては駄目ですよ」と親や教師が教えるのでそれに従うのは、他律的な規範の受け入れである。同じ規範を自律的に受け入れるためには、それを自分の心の内部に取り入れて自分自身の規範としなければならない。この取り入れができれば、自分が自分に「ひとに怪我させることはいけないことなのだ」と命令し、自分自身の規範に従うことになるのである。「社会規範を自分自身の規範にする」ためには、この道理が理解され、なるほどと納得できなければならない。

ひとに怪我させることは悪いことであり絶対にしてはならないことであるという道理が十分に納得されれば、その道理は、自分自身の心の中に定着する。この道理が理解できてはじめて、その道理を自分みずからのものにすることができるのである。世の中に規則があり、法律があるからではなく、みずからが右側通行の道理を納得して、それをよしとして取り入れているのだから、自分自身の意見に従って右側を通ることになる。

このようにして、社会規範が自分自身の規範になれば、適応も、自分自身の内面にある規範への適応という形に変わってくる。この変化が“適応の内面化”と呼ばれるものであり、これが、セルフ・コントロールの能力になるのである。

適応というのは本来、自分の「外の世界」に存在する社会規範に対する適応を意味するものであるが、抽象的思考の能力の発達により、規範のもつ道理を十分に理解することによって、自分自身の意見になると「外の世界」への適応だけでなく、内面の世界の道理にみずから従うことになるのである。他律的適応の課題として与えられた世

の中の規範は、良心に基づく自律的適応の課題となり、自分自身の良心に従うという形をとるといってもよいであろう。これが、自律的適応の時代であり、9歳を過ぎてからの課題である。

ところが、この適応の内面化をはかるという極めて重要な課題をスムーズに行うためには、9歳以前の他律的適応の時代に親と教師が、世の中の規範を十分徹底して教え込んでおかなければならない。先きののべた建造物の基礎づくりの段階で、手抜きをしないことが大切である。

しかるに、現実には、十分どころかほとんど満足に教え込まれていない。そのために、規範以外の学習課題に関するストレスを解消させようとして、より安易な手段として、自分をとりまく環境のなかの悪の要素に、自分自身を適応させていくようになる。こうなると、自律的適応を確立させることが困難になってくるのである。

他律的適応の時代に、非行の芽を摘みとってもらえなかった不幸な子供達は、自律的適応の時代を迎えたとしても、非行をくりかえすのは、規範の内面化がスムーズにいかないためである。自我を確立させなければならない時期を間近かに控えていることと、望むと望まざるとにかかわらず、内部から湧き起こってくる性の衝動とによって、はじめて体験する心の不安から、ますます反抗的な態度をとりやすくなる。

この時期に達してから、親や教師が権威者として接しようとしたり、きめこまかく接するならば、反抗心ばかりを刺激する結果となり、全くの逆効果になってしまう。“過保護”が問題になるのは、この自律的適応の時代を迎えてから後のことである。

以上のような子供の精神発達、適応の発達に関して誤った受けとめ方をして、子供を育てている親、教師は、まさしく病原菌であるし、育てられた子供は、どんな種類の非行に走ろうとも、ある種の病人であるといってよい。非行に走る児童青少年は、親と教師という病原菌の犠牲になっているのである。

自律的適応の時代を迎えた子供達の非行の中で、校内暴力や家庭内暴力に限って考えるならば、以上のべてきた根本原因の他に、社会構造上

のストレスが問題になる。この問題が、彼等の攻げき欲求を増大させていることは確かである。しかも、増大した攻げき欲求を発散させる吐け口がなく、全て抑圧しなければならない現実も見落してはならない。彼等の攻げき欲求を、暴力や暴走といった破かい的なものと短絡的に考える必要はない。それは、成長発達の途上にある者に共通して認められる衝動のエネルギーに起因する傾向でもあるからだ。

このエネルギーは、十分に燃焼されなければならないのであるが、燃焼を可能にするほど、ゆとりのある生活を彼等が送っているであろうか。

現実には、そうしたゆとりは認められない。受験指向の強い学校環境の中で、興味や適性を無視したカリキュラムの消化を強いられている。彼等が、衝動のエネルギーを合理的に燃焼させようとするならば、必然的に世の中の落伍者のレッテルを貼られてしまう。

こうした、我が国の現状は、攻げき欲求から起因する衝動のエネルギーを無理やり抑圧せざるを得ないのである。

ここにも、校内暴力、家庭内暴力などの非行を顕在化させる要因が認められるのである。しかし、こうした社会の現実には、簡単に改善することは難しい。それゆえ、すでに指摘した子供の精神発達の中でも、適応の発達を十分に理解したうえで、その徹底が要求されるのである。攻げき欲求を暴力という形でしか投げつけられない青少年に仕立てあげてしまうのは、あくまでも親と教師の誤った育児によっているからである。親も教師も世の中全体が、以上のべたような育児の責任を果す努力さえすれば、深刻な社会問題となってきた子供達の非行は、一掃されるものと考えられる。育児にやり直しはきかないことを銘記すべきである。

文 献

- 1) 戸川行男編.「臨床心理学」, 金子書房.
- 2) 戸川行男.「臨床心理学論考」, 金子書房.
- 3) 戸川行男.「人間学的心理学」, 金子書房.
- 4) 戸川行男他編.「性格の形成」, 性格心理学講座, 2, 1958, 金子書房.
- 5) 吉益脩夫.「犯罪原因論における家族の問題——社会学的, 心理学的, 生物学的見解の比較検討とわが国における研究——」, 犯罪誌, 27, 55, 1961.
- 6) 村上英治. 家族の病理, 「家族の心理」(依田編) 1958, 培風館.
- 7) 笠原 嘉. 今日 青年期精神病理像, 「青年の精神病理(1)」1976, 弘文堂.
- 8) ボールビー J. 黒田実郎他訳「母子関係の理論 ①愛着行動」, 1976, 岩崎学術出版社.
- 9) 菊池章夫他編.「ハンドブック. 社会化の心理学」1974. 川島書店.
- 10) 詫摩武俊編.「性格の理論」, 1967, 誠信書房.
- 11) 石川義博他. 異常性格と心理的・社会的環境「異常性格」(新井編), 医学書院.
- 12) 石川義博.「思春期非行少年の犯罪精神医学的研究」, 精神神経誌, 68, 77, 1966.
- 13) 田村正晨.「家庭内暴力は新しいやまいか」, 青年心理 '82, 9月, 金子書房.
- 14) 田村正晨.「“過保護に育ててはいけない”論が問題児をつくる」, 教育読本, 1981. 河出書房新社.
- 15) 田村正晨.「今のしつけが子どもの算数を決定づける」, Home Teaching 6, 1984. 旺文社.
- 16) 田村正晨.「あなたの子育ては間違っている」, 中学生非行を考える, PHP '83, 9臨時増刊号, PHP 研究所.
- 17) 小田 晋.「暴力の生物学——その生理, 生態および病理」, 1982, 7月, 青年心理, 金子書房.
- 18) 安香 宏.「現代青年の非行のメカニズム」, 青年心理, 82, 9, 金子書房.
- 19) Sullivan, H. S.: The interpersonal theory of psychiatry, W. W Norton, New York & Tronte, 1953.
- 20) Symonds P. M.: The Psychology of parent-child relationship. New York: Prentice-Hall. 1937.
- 21) Sullivan, H. S.: Conceptions of modern Psychiatry, William Allanson White Psychiatric Foundation. Washington, 1947.